

堀  
辰雄

かげろうの日記





# かげろうの日記

猶<sup>な</sup>物<sup>お</sup>はかなきを思へば、あるかなきかの心地する  
かげろふの日記といふべし。

蜻蛉日記

## その一

半生も既に過ぎてしまつて、もはやこの世に何んのなすこともなく生きながらえている自分だが、——一たい顔かたちだつて人並でないし、これと云つた才能もあるわけではないのだから、こんな風にはかない暮らしをしているのも尤<sup>もつと</sup>ものことだとは思ふものの、ただこうやつてぼんやりと明かし暮らしているがままに、世の中に

多い物語などをおりおり取り上げて、その端<sup>はし</sup>などを読んで見ると、ずいぶんありふれた空言<sup>そらごと</sup>さえ書いてあるようだから、自分の並々ならぬ身の上を日記につけて見たら、そんなものよりもかえって珍らしがってくれる人もあるかも知れない。それにまた、世間の人々が、私のようにこんなに不為<sup>ふしあわ</sup>合せになったのは、あまりにも女<sup>た</sup>として思<sup>ためし</sup>い上っていたためであろうかどうか、その例<sup>た</sup>にもするが好<sup>た</sup>いと思<sup>ためし</sup>うのだ。

何分にももうすべて一昔も前のことなので、さて、何

から書き出したら好いのだらうかしら。まあ、それ以前の取るに足らないほどの、好き事すごとなんぞは、それはそれとして、——今からもう十何年か前の、そう、たしか夏の始めだったと思う、その頃はまだ柏木かしわぎと呼ばれていたあの方が始めて私に御文おんふみをよこされたのである。その最初の時からして、あの方と云ったら外のお方とは変わったなされ方で、普通だったら下しもじもの女にでもその御文を届けさせようものを、あの方は役所で私の父に先ず真面目とも常談ともつかずに仄ほのめかされて置いて、こちらでそれをどう思おうなんぞということには少しもお構いな

さらずに、ある日、馬に乗った男に御文を持って来させられた。その使いの者がまた使いの者で、「どなた様から」と訊かせることも出来ないほど、はしやぎ切っていたので、こちらの方ではしかたがなしにその御文を受取ってしまったから、はじめてそれが柏木様からのものであることを知ったのだった。が、見れば、御料紙なんぞもこういう折のになかったものではなかったし、大層御立派だとお聞きしていた御手跡おんしゅせきもこれはあの方ののではないのであるまいかと思われるほどのものだったし、どうもすべてが疑わしいので、御返事はどうしたものだら



うかと迷っていると、昔むかし氣質かたぎの父はしきりに恐縮がって、

「やはりお出しなさい」と私に無理やりにそれを書かせた。それをきっかけにして、それからもあの方はしばしば私に同じような御文をおよこしになったけれど、最初のうちは私の方ではそれほど熱心になれず、返事も出したり、出さなかつたりしていたくらいだった。

そう云ったごく通り一遍いっぺんな消息しょうそくをやりとりしているうちに、その夏も過ぎて、秋近くなった頃、どうしたところからだったろうか、とうとう私をあの方をお通かよわせするようになった。そうしてその頃はといえば、あの方は

何を措おかれても、ほとんど毎夜のように私のもとにお通おいになって入らしつたが、そのうちにやがて十月になつた。

その月半ば、私の父は陸奥守むつのかみに任ぜられて奥州へ御下りにならねばならなかつた。——それはまだ、私があるまりあの方にもお馴なれしてもおらず、お会いしている時だつて、ただもうさしぐんでいるばかりだつたのを、かえつてあの方はいとしがられ、一生お前のことは忘れまいなどと御誓いなすつたりせられはしたものの、はたし

て人の心なんぞは頼みになれるものやら、なんとも言え  
ず不安で、自分の悲しい行末ゆくすえばかりが思われてならない  
ような日頃であつた。——ところで、いよいよ父たちが  
出立すべき日になつた。みんなが別れを惜しんでいる間  
に、父はふいと私のもとに入らしつて、御形見の硯すずりに  
何かお文のようなものを押し巻いて入れて、それからま  
た黙つて出て往ゆかれたようだつたが、私はそれをすら見  
ようともせず<sub>に</sub>いた。とうとう皆が出立した跡になつて、  
私は少しためらいながら、それにいざり寄つて、何だろ  
うと開けて見ると、「君をのみたのむ旅なる心には行末

とほく思ほゆるかな」と認めしたためられてあつた。見るべき人が見るようにと書き残されたのだらうと思つて、私は、それをそのまま元のよういでに収めて置いた。それからしばらくして、あの方がお出いでになつたけれど、目も見合あわさずに、私がじつと思ひ詰めたようにしていると、あの方は「こんなことは世にありがちなことなのに、そんなに歎いてばかりおられるのは、わたしのことをちつとも頼みに思つていてくれないからなのだらう」と私をかえつて恨むように言われるのだつた。が、そのうちに、ふと硯にあつた御文を見つけられ、それを御手に取られてお

読み出しになったかと思うと、しばらくの間それから御目をも放さずに、さもお気の毒なと言いたげなお顔をなすっぺいらした。……

その後、日の立つにつれて、そんな遠い旅空にある父のことを思いやるだけでさえ気がかりでならないのに、私がこうしてもういよいよあの方お一人にお頼りするより外はないようになればなるほど、何だかだんだんあの方の御深切がお口ほどでもないように思われてくる一方で、その心細いこととといったらないのだった。

その明くる年の春から夏にかけて、私はずっと悩み暮らし、八月の末になって道綱みちつなを生んだが、いまから思えば、まあその頃があの方も私を一番何くれとなく深切になすって下すっていた頃だったようだ。

ところが、その九月になって、あの方がお出かけになられた跡に手筈てぼこが置いてあったので、何の気なしに開けて見たら、どこかの女のもとへ送るおつもりだったらしい御文がしのばせられてあった。私は驚いてどうしたら好いかもわからないくらいだったが、せめて自分がそれを見たと言ふことだけでもあの方に知らせてやりたい

と、わざとそれをそのまま放って置いた。しかし、あの方はそんなことには少しも気をお留めにならぬらしかった。——そんなことがあつてから、私はとても気になつてそれとはなしにあの方の御様子を窺うかがつてみると、あゝる夕方、急に「どうしても往かなければならない所があるから」とおっしゃって出て往かれた御様子がどうも不審まぢだつたので、人を付けさせて見たら、はたして坊の小路のこれこれの所へおはいりになつたと云うことだつた。——やっぱりそうだったのかと、胸もつぶれるような思いで、それからの数夜と云うもの、私は寐いも寐ねられ

ず、しかしどうしようもなく一人きりで歎き明かして  
た。そんなある夜の明け方だった。誰か訪れて来たもの  
があるらしく、しきりに門を叩たたいているようだった。す  
ぐあの方がいらしたのだとは分かったものの、私も少  
し意地になって、いつまでも戸を明けさせずにいた。や  
がて私の知らない間に、あの方はすごすごお帰りになっ  
てしまわれたらしかった。おおかた小路の女の所へでも  
入らしつたのだらうと思った。が、朝になって、何だか  
そのままにして置いても気になるし、それかと云って戸  
をちよっとお明けしなかつた間ぐらいはとも思うものだ



から、私は「歎きつつひとりぬる夜の明くるまはいかにひさしきものとかは知る」と、いつもよりか少しひきつくろった字で書いて、萎しおれかけた菊に挿してやった。すぐ御返事があつたが、「私だつてお前が戸を明けてくれるのを、夜の明けるまでだつて待つて見ようとしたのだが、折悪あしく急ぎの使が来てしまったものだから——」と書いてあるぎりだつた。いつもに変わらず、こちらがこれほどまでに切ない心もちをお訴えしているものを、あの方はさも事もなげにあしらわれようとしかなさらないのだ。どうしてそんな女のことなんぞを私にもっと出来る

だけお隠しなすって、いましばらくなりと、「内裏うちへ」  
——などとおっしやってでも、私をお瞞だましになっていて  
くれられなかったものなのだろうか。

それからだっても、あの方はいかにも何気ないような  
御顔をなすって、おりおりお見えにはなったが、それす  
らだんだん途絶えがちになり、そのうちにその堪えがた  
いほどだった冬も過ぎ、やっと春が立ち返って、三月に  
なった。三日の節句にも、桃の花なんぞを飾りつけてお  
待ちしていたのにととうとうお見えにならなかつた。近頃

姉のもとへしげしげとお通いになつて来るいまひと方も、いつもはそんなことなど一度もなかつたのに、その日だけはどうしたわけか、お見えにならずにしまった。が、その翌日、御ふた方とも打揃つてお見えになつた。ゆうべから待ち侘<sup>わ</sup>びていた女房どもが、そのままにしてしまふのも何だからと云つて、きのう飾つてあつた桃の花を再び取り出してきたので、その花の一と枝を折つて手にすると、それはもう少し萎<sup>しお</sup>れかかつていた。私はそれをみるとつい胸が一ぱいになつて、それに手習でもするよふな気で「待つほどのきのふ過ぎにし花の枝はけふ

折ることぞかひなかりける」などと書き散らしていると、それをいきなりあの方が奪いとられ、その枝をかざしながらお読みになって、「何だ、この歌は。お前とは一生をかけて誓っているのじゃあないか。こんな一年ごとに咲く花なんぞとはお前が違っているの知らないのか」などと、いつもの真面目とも常談ともつかないような調子で、私をお虐め<sup>いじ</sup>なさるのだった。

そのことがいつか姉のもとに来て入らしつたいまひと方の御耳にもはいったと見え、「私もゆうべはわざと余所<sup>よそ</sup>で過して来ました。花があるので好んでこちらへ来ただ

けなのだろうなどと言われそうでしたから」などと、そのお方までがしたり顔にそんなことを言つてよこされた小憎らしさ。

それからまだ二た月とは立たないうちに、私はいつのまにやらただ一人で起き臥ふしすることの多いような身の上になりながら、姉の方へばかり絶えずいまひと方が出で這はい入りなすつていられるのを、胸のしめつけられるような気もちで見て暮していたところ、五月になると、そのお方さえも、まるでそう云う私をお避けなさりでもす

るかのように、余所へ私の姉をお連れして往ってしまつた。それから私はほんとうの一人ぎりになつてしまつたのだつた。——が、こう云うはかない身の上になつたのは、私ばかりではなく、私なんぞよりもずっと前からあの方がお通いになつて、お子様などもたんとおありなさると云うお方のもとへも、この頃は全くあの方は絶えられているとお聞きして、ましてどんなにお心細いことだらうかと、おりおり消息などをさし上げては自分でもわずかに気を紛らわせようとしていた。が、おとなしそうなそのお方は、なぜかしら（あるいは私だけが別して

人の苦しみというものを過当に見るようなところがあるのだろうかしら、いつも私の相手になるのをお避けになるような素気ない御返事しかおよこしにならなかつた。誰もかもみんなそういう私をお避けになつたと見える。

そのうちに六月になつた。月初めからずっと長雨ながあめが続つき、この頃はとりわけてあの方もお見えにならなかつた。これまでだつたらこんなことはなかつたのに、どうしたのか、私はまるで心が空虚うつろになつて、そこいらに置い

てあるものさえ静かに見られない癖がついてしまっていた。「こんな風にしてあの方は私とお絶えなさるおつもりなのかしら。そうだとすれば、何かあの方のことを自分に思い出させてくれるようなものは残っていないかしら」なんぞと、そんなことまで考え出しながら、あの方がこうしてお離かれになればなるほど、あの方に対してついでいまままで覚えのなかつたくらいにお慕わしさのついつて来るような自分をば、自分でどうしようもなくていた。すると十日ばかり立って、あの方から珍らしく御消息のあったのを読んでいると、何くれとお書きになって、



最後に「帳とばりの柱に結わえて置いた小弓の矢を取ってくれ」と言われるので、まあ、あの方のこんなものが残っていたのにと、やっと気がつき、それを取り下ろして持たせてやるような、悔くやしいことさえもあった。

そんな風に、あの方がますます私からお離かれがちになっ  
ていられる間も、私の家はちようどあの方が内裏うちから御退出になる道すじにあたっていたので、夜更けなどにしばしばあの方が私の家の前をお通りすぎなさるらしいのが、折から秋の長い夜々のこととて、ともすれば私は目覚めがちなものだから、いくら聞くまいと思っ

も、手にとるように耳にはいつてくることがある。そんな時などには「何とかしてあれだけは聞かずにいたいものだが——」と思いながら、しかもその一方では、いましがた私の家の前をつづけさまに咳しわぶきをなさりながらお通りすぎになったあの方が、だんだんその咳と共に遠のいて往かれるのを、どこまでも追うようにして、私は我知らず耳を側立そばだてているのだった。……

## その二

それから十年ばかりと云うもの、私の父はずつと受領ずりようとして遠近おちこちの国々へお下りになっていた。たまさかに京へお上りになっても、四五条のほとりにお住いになるので、一条のほとりにあつた私の家とはたいへん離れていた。それで、こうやって私たちが人少なに住んでいた家は、誰も取り繕つくろつてくれるような者なんぞいなかった。ので、次第次第に荒れまさつて来るのを、私はただぼん

やりと眺めながら、ようやく成長して来る道綱一人を頼みにして、その日その日をはかなげに暮らしているばかりだった。

そのうちにやつとその幼い道綱が片言まじりに物が言えるようになって来たが、それも、いつ聞き覚えたのか、あの方がいつもお帰りの時に、「そのうちにまた——」などとおっしやって出て往かれるのを、「またね……またね……」などと口真似をして歩きまわったりしているのだった。——そのようなわが子のあどけない姿を見て覚えすほほ笑まされながらも、どうしてまあこうも自分

はこんな幼な子の無心の振舞の中にすら、それに写る自分の悲しみをしか見出せないのだろうと歎かずにはいられないのだった。

こういう私たちの日頃の有様を御覧になっても、あの方は一向無頓着むとんちやくそうに、たまにお出いでになつたかと思うと、またすぐお帰りになつて往かれた。おおかた私たちが心細がつているだろうとさえもお思いにはならないものに見える。いつも云いわけがましく「この頃は為事しごとが多いので——」などとおっしゃっては入らっしゃるけれど、まあちよつとでもこれに目をお留めなすつたら、この数

知れぬほどの蓬よもぎよりもまさかお為事が多いとはおつしやれまいにと、私はわが家の荒れ放題になった庭をいまさらのように見やっては、少し自嘲的じちような気持にもなつて、それがますます荒れ果てるがままに任せておいたくらいだった。

そんな私に向つて、「まだお若い身空ですのに、どうしてそのようにばかりして入らつしやるのですか」と気づかつては、熱心に再婚などを勧めてくれる人もあつた。それなのに、あの方はまたあの方で、「おれのどこが気に入らないのだ」と云つた顔つきをなすつて、少しも悪

びれずにいらっしやるので、本当にどうしていいのやら、私は思いあぐねるばかりだった。何んとかしてこの胸に余る思いをつぶさにこの人にも分からせようがものはないかと思えば思うほど、私はあの方に向っては一ことも物を言うことが出来ずにしまうのだった。

「今のようにときどき思い出されたように入らっしやるよりか、いつそのこともうすっかりお絶えになっすった方がどんなに好いか知れやしなない」などとまで私はその日頃考え出していたものだった。また意地の悪いことにはそんな時にかぎってあの方がひよっくりお見え

になつたりする。「どうして私のところへなぞ入らしつたのですか」と云つた顔をしたぎり、私が何も言わずにいるものだから、あの方も何だかひどく工合悪そうにしていらつしやる。まあ、せつかくこうしてお出になつていられるのだから、こうばかりしていてもと、つい弱気になろうとする自分を、私は一生懸命に抑えつけて、あの方がいかにも物足らなそうにお帰りになるがままにさせている。……

そんなことばかり繰り返しているうちに、とうとうある日などはあの方もすつかり気を悪くされたと見え、つ



と端はしの方へ歩み出されてから、幼い道綱をお呼び出しになつて何か耳打ちをなすつていらしつたが、そのままいつにない怨み顔うらみをなされて出て往かれてしまった。あの子ははいつて来るなり、私の前でしくしく泣いている。「どうしたの」と尋ねて見ても返事もせず<sub>に</sub>いた。あの方にきつとおれはもう来ないぞ、とでも言われたのだろうと思つて、それ以上尋ねるのは止めて、いろいろ慰めなだたり賺すかしたりしていたが、それから何日たつても、あの方からは音信おとづれさえもなかつた。「まさかと思つていたのに、本当にこのままお絶えなさる気なのかしらん」と不

安そうに思いながら、それでもまだそれを半ば疑うような気もちで暮らしていると、ある日のこと、こないだあの方の出で往かれる時に鬢びんをお洗いになった泔ゆするつき坏の水がそっくりそのままになっているのにふと気がついた。よく見ると、その水の上にはもう一面に塵ちりが溜たままっていた。「まあ、こんなになるまで——」と私は胸をしめつけられるような心もちで、それにいつまでもじっと見入っていた。——そんなことさえも、その日頃にはとかくありがちなのであった。

そういう一方に、あの坊まちの小路の女のところで子供が生れるとか言つて大騒さわぎをしていたらしかつたが、その頃からどう云うものか、あの方はあんまりその女のもとへはお出にならなくなつたとか云う噂うわさだつた。その女のことを憎い憎いと思いつめていた時分に「いつまでも死なせず置いて私の苦しみをそっくりそのまま味わせてやりたいものだ」と思つていた通りに、すべてのことがなつて行きそうだつた上、その生れたばかりの子供までが突然死んだと聞いた時には、「まあ何んていい気味だろう。急にそんなになつてしまわれて、どんな心も

ちがしているかしら。私の苦しみよりかいま少し余計に苦しんでいることだろう」などと考えて、本当に私は胸のうちがすっぱりとしたくらいだった。——こんな人らしくもない心の中までここに書きつけるのは、ちよつとためらわれもしたけれど、こう云うところにかえって生きとした人の心の姿が現われているかとも思えるので、この私と云うものをすっかり分って貰うためには、やはりそう云うものまで何もかも私はこの日記につけて置きたいのである。

さて、そんなことのうちに数年と云うものは空しく過ぎ去ってしまったが、そう、何でも五月の二つあったあの年のことである。その閏うるふ五月には雨がほとんど絶え間もなしに降り続いていた。そうしてその月末から、どうしたのか、私はどこと云うこともなしに苦しくって溜まらなかった。もうどうなったって好いと思っっている自分のことではあるし、そんな命をさも惜しがってでもいるようにあの方に見られたくはないと思っ、私は瘦やせ我慢をしていたが、側の者たちがいろいろと気づかっ、しきりに芥子焼なんぞという護ご摩まなども試みさせるのだ

けれど、一向その効力はないのだった。——そうやって私がひどく苦しみ続けている間も、あの方は謹慎中だからと言われて一度だって御見舞には来て下さらなかつた。何でも新しい御邸をおつくりなさるとかで、そちらへ毎日のようにお出になるついでに、ちよっとお立寄りになつては、「どうだ」などと車からもお下りなさらずに御言葉だけかけていらつしやるきりだった。そんなようなある物悲しく曇った夕暮に、私がすっかり気力も衰え切つているところへ、そちらからお歸りの途中だといわれて、あの方は蓮はすの実を一本人に持たせて、「もう暗

くなつたので寄らないけれど、これは彼処のだから御覽」とことづけて寄こされた。私はただ「生きているのかどうかも分かりませんひどなので——」とだけ返事をやって、そんな蓮の実なんぞは見る気にもなれずに、そのまま苦しそうに臥したきりでいたが、そのようなたいそうお見事らしい御邸だって、そのうち見せてやろうなどと おっしやって下すってはいるものの、こうやって自分の命のほども分ならず、それにまたあの方のお心の中だつて少しも分らないしするので、どうせ自分はそれをも見ずにしまうことだろうなどと考え続けていると、その

心細いことといったら何んともかとも言いようのないほどであった。

そんな工合に何時までたっても同じような容態ようだいだったので、名高い僧なども呼んでいろいろと加持かじを加えさせて見たけれど、一向はかばかしくはならずにいた。そこでしまいには、事によるとこのまま自分もはかなくなってしまうのかも知れない、そうなたって自分の身なぞは露ほども惜しくはないけれど、ただあとに一人きり残される道綱がどうなることか知らん、と私は急にそれが気がかりになって、ある日、いかにも心もないあの人



だけれど、まあそれでもと、苦しいのを我慢しいしい、  
脇息きょうそくによりかかりながら、やつと筆を手にして、遺書  
と云うほどのものではないが、ともかくもあの方に道綱  
のことをくれぐれもお頼みし、それからその端に「他の  
人には言われないうようなおかしなことまでいろいろ申し  
上げましたけれど、どうぞそんなことをもお忘れなさら  
ずにおいて下さいませ」などと書き添えていた。がそのう  
ち、知らず識しらずの裡うちに、あの方に対する自分の気もち  
がいつもほど苦にがくはなくなっているのに気がついた。そ  
うしてあの方とのことで今の自分に残っているものと云

つたら、不思議に心もちのいい、ほとんど静かな感じのものばかりであつた。おそらく、私の身の極度の衰えがそういう静けさを自分の心に与えていたのでもあろうか。

そうこうしているうちに、六月の末頃からいくぶん物心地がついて来たようで、秋も過ぎ、冬になった時分にはもう大ぶ私も人心地がしてきた。その間に、あの方たちは新築した御邸の方へお移りなつて往かれたが、私だけはやはり思ったとおり、このままここにこうしておれ

ば好いと云うことになったらしかった。

が、そうなたらそうなたで、別にどうと云うこともありはしないのに、やっと恢復かいふくし出した私はその頃になつてかえつて何だか気もちが落着かずにはかりいたけれど、十一月になつてから雪がたいへん降つた。そんな雪のふりつづいた頃、どうしたのか、まだ充分に癒いえ切つていなかつたらしい身うちにめつきりと衰えが感ぜられ、世のさまざまなこと、ことにあの方のことなぞが言いいようもなく辛く思われた一日があつた。私はその日は日ぐらしそんな雪を眺めたり、また、いつぞやのほとん

ど死ぬばかりだったような日々のことだの思い出したりしながら、「ああ、雪なんぞだったら、いくらこんな積ったって、やがてまた消えて往ってしまえるのだ。それなのに、私は一生のうちにたった一度の死期をも失ってしまったような……」などとさえ悔やみ出していた。……

### その三

そのうちに道綱もようやく成人して来た。が、その頃

のことになると、まだついこの間のことのように何もかも自分に一どきに思い出されてしまうものだから、さてそれを書こうとすると、かえって何だか書かずともよいようなことまでも書いてしまいそうな気がしてならない。  
い。……

先ず思い出すのは、これも書かずともよいことかも知れないが、まあ、思い出すがままに書いて見ると、ある年の丁度若苗わかなえの生い立つ頃、——そう、若苗といえ、そんなことのある数日前、私はあんまり所在がないので草などの手入れをさせていたら、たくさん若苗が生え

ていたので、それを取り集めて母屋の軒端のきばにそっくり植  
えさせて水なども気をつけてやらせていたのだった。が、  
その日私が見に往つてみると、それはもう残らず色が変  
つて葉なんぞもすっかり萎しおれかえってしまっていた。

——この頃まるつきりあの方のお見えにならない私の家  
のものといったら、まあ、こんな軒端の苗までも私の真  
似をして物思いをする見たいなどと、またしてもそん  
なことを考え出していると、そこへあの方から珍らしく  
御文があった。「いくらこちらから文をやっても返事が  
ないので、はしたなく思われそうだから遠慮をしていた。

今日でも伺いたいと思うが——」などと書いてある。御返事は上げまいと思ったが、側の者たちにかれこれ言われて、私はやっとそれを書いて持たせてやった。それからすぐ日が暮れた。まだそれが往きつかないだろうと思う時分に、あの方が往きちがいに<sup>ものいみ</sup>お出になっちゃった。皆に「何かわけが<sup>ものいみ</sup>あおりなのかも知れません。何気ないようにして御様子をごらんなさいませ」などと<sup>ものいみ</sup>言われて、私も少し気をつけていた。が、あの方は「物忌ばかり<sup>ものいみ</sup>続いていたのだ。もう来まいなどとおれが思うものか。どうもお前がすぐそうひがむのが、おれにはおかしいくら

いだ」などといかにも裏もなさそうにおっしやるので、こちらも何だか気抜けのしてしまいうくらいだった。「明日は用事があるから、また明後日でも——」などとおっしやって帰って往かれたけれど、私もそれを本気にはしないものの、もしかしたらと思いついてるうちに、だんだん日数が過ぎて往くばかりだった。

やはりそうだったのかと気がつくにつけ、前よりも一そう心憂く思われて、相変わらず自分の思いつづけていることといったら、仏にお祈りしてでも何とかして死にたいものだと云うようなことばかりだったが、あとに一人



残る道綱のことを考えると、それも出来そうもないのだ  
った。「お前が早く成人して、安心の往けるような妻な  
どに預けてしまえたら、どんなに好いだろうに。いま、  
わたしが死んだら、どんな思いをしてお前が一人でさす  
らうことだろうと思えば、ほんとうに死ぬのも死にく  
い。まあ、形かたちでもかえて、世を離れたらと思うのだけ  
れど——」と私が独ひとりごと言でも言うように言っていると、  
まだ深くは何もわからぬらしいが、あの子も悲しそうに  
「そうおなりになったら、まるも法師になりとうござい  
ます。この世に交まじわっておりまして、何になるでしょ

う」と言いながら、目に涙を一ぱい溜めている。私はそれをみると、やっと気を取りなおしながら、いまの話を常談にしてしまおうとして、「そうなって鷹も飼えなくなったら、どうしますか」と言うと、道綱はいきなり立ち上って往って、自分の飼っていた鷹を籠かごから出して矢のように放してしまった。それを傍で見っていたもので泣き出さないものはなかった。

ちようどその暮がたに、あの方から御文が来た。また天下の空言そらごいことだろうと思えるので、気強く「只今ただいまは心もちが悪うございますので、いずれ後ほど——」とそのまま

使いの者を返させた。そんなこともあった。

七月、——お盆が近いので何かと世間では騒ぎ出して  
いた。毎年母の盆ぼに供のことだけはあの方が几帳面きちようめんになさ  
って下すっていたのに、今年はどうなるのやら。もうあ  
の方も私からお離かれになったのかと、亡なき母も地下で悲  
しくお思いになるかも知れない、しかしまあ、もうすこ  
し待って見ようと思っていたところへ、いつもものように  
ちやんと盆供を調ととのえて下すった上、御文まで添えてあ  
った。私はそこで「亡くなった人のことはお忘れでない

と見えます。しかしわたくしのことなどは——いいえ、こんな果敢はかない身のことなどは、本当に自分でも忘れられたら忘れてしまいたいくらいなのですものを」と例によつて少ししひねくれて書いてやった。

やがて相撲すまいの頃になった。もう十六になった道綱がしきりにそれへ往きたそうにしているので、装束をつけさせて、先ず殿のもとへと言いつけて出してやった。その夕方、あの方が車の後しりへでも乗せて送つて来て下さるかと思つていると、他の人に送られて来た。その次の日も道綱は出かけて往つたが、夕方、また雑色ぞうしきなどに送られ

て来た。子供心にも、いつもなら御一緒に送って下さるものをと、そうやって一人ぼっちで帰って来るのがどんな思いであろうに。……

ところが、八月にはいつて、ある日の夕方、突然あの方がお見えになった。「明日は物忌ものいみだから門を強く鎖とぎしておけ」などとお言いつけになって入らっしやるらしかった。私はもう物も言われなくらい、胸が沸わき立つような気もちがしていると、あの方は道綱をお側に引きよせられて、そんな私の方をちらつと見やっでは、何かひそひそと耳打ちしていらしっていた。「我慢をしておい

で」なぞと囁いているのが、ふと私の耳にも入ったりする。しかし私はどうにもしようがなしに、黙ったまま向き合っていた。翌日も、一日中あの子をお側に置かれて、「おれの心もちちはちつとも変らないのに、それを悪くばかりとるのだ」などとお聞かせになって入らっしやるらしかった。

それから、どうしたことやら、不思議なほどあの方はしばしばお見えになるようになった。この頃急に大人寂おとなさびてきたような道綱があの方のお心をも惹ひいたものと見える。それはあの方がいつになくいろいとあの子の御

面倒を見て下さって、今度の<sup>だいじょうえ</sup>大嘗会には何か禄を給わらせよう、それから元服もさせようなどと、おっしやり出しているのでも分かるのだった。私までも一と頃はいささか昔に返ったような気もちになりかけていたくらいだった。

が、道綱の元服もとどこおりなく果てたかと思うと、またしばらく例の御物忌とやらでお見えにならないようになった。毎日のように、道綱は内裏<sup>うち</sup>に一人で出て往つては、また一人で淋しそうに帰ってくる。そんなある日のこと、あの方が「きょうは往けたら往こう」などと御

消息を下すつたので、もしやと思ってお待ちしていたが、その夜も空しく更ふけて往くばかりだった。やがて気づかっていた道綱だけが、ただ一人で浮かない顔をして帰ってきた。そうして「殿も只今御退出になりました」などと語るのを聞いて、いくら夜が更けていたって昔ながらのお心さえおありだったならばこんなことはなさるまいに、と私は胸が潰つぶれるような思いがした。それから、また、以前のようおとさたに、音沙汰がなくなってしまうていた。

やっと十二月になって、七日頃にあの方がちよいとお



見えになった、何だかもう顔を見られるのも不快なので、  
 几帳きちようをよせて、その陰に引きこもっていると、お出いでにな  
 ったばかりなのに、「日が暮れたな。どれ、これから参内さんだい  
 せねば——」とおっしやっってお帰りになられたぎり、音信おとずれ  
 もなくて、十七八日になった。

その日の昼頃から、雨がそんなに強く降ると云うほど  
 ではなしに、ただ何となく降りつづいていた。こんな日  
 なんかにはもしやと云うほどの気にさえなれず、私はし  
 ようことなしに昔のことなどを思い出しながら、昔の自  
 分が心待ちにしていたすべてのことと今の自分とは何と

云うひどい相違だろう、あの頃はこんな雨風にだって御  
いといなさらぬものをと自分は信じていたのに、なんぞ  
と考え続けていた。しかしいま、こうやってしみじみと  
思い返して見ると、その頃だって自分はちっとも気の緩ゆる  
むような心もちのしたことなんぞはついぞなかったよう  
にも思われた。これと云うのも、一体、以前から自分の  
心が驕おごっていたのだらうかしらん。ああ、こんなことに  
なるなんて自分は夢にも思わなかったものを。それほど  
まで私は大きな夢を持ちつつづけていたのに。……  
そんな雨がそのまま小止おやみなしに降りつつづいているう

ちに、やがて灯ひともし頃となった。みなみおもて南面には、この頃妹のところへお通いになって来られる御方がある。足音がするようだから、きつとその御方がおいになったのだろ

う。私が「まあ、こんな雨だのによくいらっしやるわね」と自分の沸き立つような心を抑えつけながら、独言のように言うと、私の前に坐っていた古女房が「昔の殿でしたら、これ以上の雨にだって、御いといなさらずにいらしたものですのに」とすこしなみだ泪ぐんでこた応えた。私はじつと無言のままでしたが、そのうちにふいと何か熱い

ものが頬を伝い出したのに気がついて、覚えず「思ひせ  
く胸のほむらはつれなくて涙をわかすものにざりける」  
と口を衝いて出たままを口の中で繰り返し繰り返して  
いた。そうしてとうとうそのまま、そんな臥所ふしどでもない  
所で、私はその夜はまんじりともせず<sup>に</sup>過ごしてしまっ  
た。

## その四

去年の春、呉竹くれたけを植えたいと思つて人に頼んでおいた

ら、それから一年も立ったこの二月のはじめになってやっと「さし上げますから」と言ってきた。「いいえ、もう少しも長らえたいとは思えなくなりましたこの世に、何でそんな心ないようなことをして置けましょう」と私  
がことわらせると、「まあ、たいへん狭いお心ですこと。  
あの行基菩薩ぎょうきぼさつは行末の人のためにこそ実のある庭木は  
植えなされたと申すではありませんか」などと言い添え  
て、その木を送ってよこしたので、つい私もそれに気も  
ちを誘われるがままに、「そう、ここはこの上もなくふ  
しあわせな女の住んでいた所だと、見る人は見るがいい」

と思つて、胸を一ぱいにさせながら、それを植えさせた。

それから二三日して、雨がはげしく降り、そのうち東風までも吹き加わつて来たので、あの呉竹はどうなつたかしらと思つて見やると、もうそれは二三本傾いてしまつていた。早く元のようにしてやりたいと思ひながら、あまま雨間を待っているうちに、しかしこう云う自分だつて、いつその行末はこんな思ひがけないようなことになるかも知れないのにと、またしても例の物思ひをし出そうとしている自分に気がつくど、私はもうそんな自分をば勝手に一人で苦しませるために、さっきの呉竹がますます

傾き出しているのを、わざとそのままにさせて置いた。

この頃あの方はずっと近江おうみとか云う女のもとへお通い詰めでと云うことをお聞きしていた。

そんなある日のこと、あの方から珍らしく御消息があつて「私の心の怠りでもあるが、いま忙しいことも忙しいのだ。夜分でもと思うけれど構わないか。何だかお前が怖こわいような気もするが——」などと書いておよこしになった。私は「只今気分が好くありませんので何も申し上げられません」と素そっ気けない返事をやったが、そのす

ぐ跡からそんな返事をやったことでもって自分から絶え入るような思いをしていると、その夜、あの方はいかにも平気そうな御様子をなすってお見えになった。ほんとうに悔<sup>く</sup>やしいと思つて口も利<sup>き</sup>かずにいると、あの方は悪びれもせず<sup>に</sup>常談ばかりお言いになつていらした。それが私にはとても辛くて辛くて、とうとうこの日頃ずつと我慢しつづけていたことをお訴えし出していると、そのうちにあの方は何とも御返事をなさらなくなつてしまった。そうしていつの間にかもう寐入つてしまわれたようだった。私に急<sup>に</sup>気抜けがしてそのまま黙つてい



ると、その時ふいとあの方は薄目をお開けになって、そう云う私に「どうしたのだ。もう寐てしまったのか」と意地悪そうにお笑いかけなすった。けれども、私はもう石のように押し黙ったぎり、そのまま夜を明かしてしまつたので、翌朝あの方は物もお言いにならずにお歸りになられた。

それから二三日するかしないうちに、あの方は何事もなかつたかのように、例の縫物などを持って来させて、「これを仕立ててくれ」などと言っておよこしになった。が、私はそれには手もつけずに、そっくりそのままそれ

を返してやった。

三月も末近くなつてから、父が京に上つて来られたので、私はあんまりこうして暮してばかり居ても息苦しくつて溜たまらなかつたし、それに忌いみも違たがえがてら、しばらく父の所へ往くことにした。そちらで、この間から思い立っていた長精進ながしやうじんもはじめようかと思ひ、いろいろその支度をし出しているところへ、あの方から御文があつた。相変らず「勘当かんどうは未まだなのか。もう許してくれるなら、暮方にでも往きたいがどうだ」などとある。私がそのま

ま返事を出さずにいると、人々がそれではあんまりだと言つてうるさいので、「二た月もお見えにならなかつたのに、不思議な御文ですこと」とだけ返事を書いてやつた。少しでも早く静かに落着きたいと思うので、急いで父の家へ引き移つて往つた。月のない空に、夜まで一そ  
う更けまさつて見えた。いつものように私の胸の中は沸わきたぎるようだったけれど、父の家は手狭でもあつたし、  
生憎あいにく人もごたごたしていたので、息もろくにつけずに、  
胸に手を置いたような、重くろしい気もちでその夜は明  
かした。

思ったとおり、あの方からはそれっきり何の音信もなかった。

四月にはいると、道綱を側に呼んで「お前も一しよにおし」と言つて、いよいよ長精進を初めた。と云つても別にものものしくはせず、ただ脇息の上に香を盛つた土器かわらけを置いたぎりで、その前で一心ふしあわに仏にお祈りした。その祈る心もただ「大へん私は不為合ふしあわせでございました。昔から苦しみばかりの多い身でございましたが、この頃はほんとうにもう生きている空もないほどでございました。

す。どうぞ思い切つて死なせて、菩提ぼだいをかなえさせて下さいませ」などとばかりで、少しさしぐみながらお勤つとめを続けていた。

ああ、一昔前、此頃は女だつても数珠ずずをさげ経を手にしていない者はないくらいだと人々の語るのを聞き、「そんな尼のような御顔をなすっていらっしやるから寡やもめにおなりになるのでしよう」などと非難めいたことまで言つた、その頃の自分の心はどこへ行つてしまったのやら。そんなことを私が言っていたのを聞いた人々がもしいまの私を見たら、こうして明け方から日の暮れまで倦たゆま

ずにお勤しているのを、まあ、どんなに笑止しょうしに思うこと  
だろう。こうまで果敢はかない人生をどうしてあんなに気強  
いことが言えたのかと、いまさらながら昔の自分のそん  
な無信仰が悔やまれてならないのだった。

そうやって二十日ばかりお勤をしつづけている間に、  
私は夜分になると何だか苦しいような夢ばかり見せられ  
ていたが、ある晩などは、私はそんな夢の中で、腹のな  
かを這はいまわっている一匹の蛇へびのために肝きもを食べられて  
いた。——あんまり恐ろしかったので思わず目を覚まし  
たが、それからまた私がうとうとしかけると、また夢

でもって、それを癒すなおには顔に水を注ぐが好いと何人とも知れずに教えてくれた。

そんな夢の吉凶などは自分にはわからないけれど、こ  
うやってここに記して置くのは、このような私の身の果  
てを見聞くだらう人が、夢とか仏などは果して信ずべき  
か否か、それによって決めるがよいとも思うからである。

五月になつてから、私は物忌も果てたので、自分の家  
へ帰つた。私の留守の間、すっかり打棄うつちやらかしてあつた  
ので、草も木も茂るがままに茂っていたところへ、程も

なく長雨ながさめになってしまったものだから、前よりも私の家は一そう鬱陶うつとうしいくらいであった。雨間あままを見ては、お勤の暇々に、私も少しずつ手入れをさせ出していたが、そんなある日のことだった。私の家の方へあの方のお召車らしいのがいつものように仰々しく前駆させながらお近づきになって来られた。ちょうどその時私はお勤をしていたところだった。人々は「殿がいらしたようだ」などと騒ぎ出していたが、どうせいつものようなのだろう。と思いはしたものの、私も胸をときめかせていると、やっぱりあの方は私の家の前はそのままお通り過ぎになっ



てしまわれた。皆はもう物も言えずに、ただ顔と顔とを見合わせているばかりらしかった。私だけは何気なさそうに、さつきから止めずにいたお勤をなおも続けているようなふりをしていたが、しかし心の中には何かいまままでについぞ覚えたことのないような、はげしい怒りにも似たものを涌わき上がらせていた。――

六月の朔ついたちの日、「お物忌のようですから」と門の下から御文をさし入れていった。おかしなことをすると思つて、披ひらいて見ると、「もうそちらの物忌も過ぎただろ

うに、何だっつていつまで余所よそへ往っているのだ。どうもわかりにくそうなのので、つい伺わずにもいるが。

——こちらの物詣ものもうでは穢けがれが出来たので止めた」などと書いてある。こちらへもう私の帰って来ていることを今までお聞きにならずにいるはずはないと思われるので、一層腹が立ってならなかったが、やっとそれを我慢して、「こちらにはずっと前から帰っておりました。そんなことなぞどうしてあなた様にお気づきなされましようとも。わたくしの知った所なんぞとは違った、思いもつかないような所へしじゅう御歩きなされていらっしやるの

でしようから。——何もかもみな、今まで生き長らえて  
いる私の身の怠りなのですから、いまさら何も申し上げ  
ようもござりませぬ」と返事を書いて持たせてやった。

本当にこんな風にときどき思い出されたように何か気  
安めみたいなことを言っただけで来られたりなんかすると、か  
えって私には辛くってならない。不意にでもあの方にや  
って来られて、またこの前のように侮やしいこともない  
とはかぎらない。こんな私なんぞは、いつそのことこれ  
つきりどこかへひそかに身を引いてしまった方がいいの  
ではないかしら。——「そう、それがいい、——そうだ、

西山にはこれまでもよく往った寺があるけれど、あそこへ往って見よう。あの方の御物忌のお果てなさらぬうちに——」と私は突然思い立つなり、一日も早くと思つて、四日の日に出かけることにした。

ちようどその日はあの方の御物忌も明けるらしいので、気ぜわしい思いで、いろいろ支度を急がせていると、人々が上<sup>うわむしろ</sup>蕙の下から何か見つけ出して「これは何でしょう」などと言ひ合つていた。ふと見ると、それはいつもあの方が朝ごとにお飲みなすつていた御薬が檀<sup>たとう</sup>紙<sup>がみ</sup>の中に挿まれたままになつて出て来たのだった。私はそれ

を受け取って、その紙の上に「所詮しよせん生れ変らねばと思つてはおりますけれど、どこぞあなた様がわたくしの前を素通りなされるのを見ずにもすむような所がござりましたよ。どうかと存じまして、今日参ります。ああ、また問わず語りをいたしてしまいました」と書きつけ、その中に元のように御薬を入れて、道綱に「もし何か訊かれそうだったら、これだけ置いて早く帰っていらっしやい」と言いつけて持たせてやった。

それを御覧になると、余程あの方もお慌あわてなされたと見え、「お前の言うのも尤もつともだが、まあどこへ往くの

だか知らせてくれ。とにかく話したいことがあるので、これからすぐ往くから——」と折返し書いておよこしになった。それが一層せき立てるように私を西山へと急がせた。

## その五

山へ行く途中の路はとり立ててどうと云うこともなかったが、昔、しばしばここへあの方とも御一しよに来たことのあるのを思い出して、「そう、四五日山寺に泊つ

たことのあったのも今頃じゃなかつたかしら、あのときはあの方も宮仕えも休まれて、一しよに籠こもって入らしつたつけが——」などと考え続けながら、供人もわずか三人ばかり連れたきりで、はるばるとその山路を辿たどって往った。

夕方、やっとある淋しい山寺に着いた。まず、僧坊に落ちついて、あたりを眺めると、前方には籬まがきが結われてあり、そこいら一めんに見知らない夏草が茂っていたが、そんな中にぽつりぽつり竜胆りんどうがもう大かた花も散つたまま立ちまじっているのが佗びしげに私の目に止まっ

た。

湯などに入つてそれから御堂にと思つているところへ、里の方から人が駈けつけて来たようなけはいであつた。留守居の者の文を急いで持つてきたのだつた。讀んで見ると、私の出かけた跡にすぐ殿からお使いの者が見えて私を引き止めるようにと云いつかつて参つた由、留守居の者が私の出立の模様やそれから日頃の有様などを精しくくわ話して聞かせると、その男までつい貫い泣きをし、「ともかくもそのことを殿に早くお知らせ申しましょう」と急いで歸つた由、——やがてそちらへ殿が御自身で御



迎えに往かれることになりそうですからその御用意をなさいませなどと細々こまごまと書いてきた。あれほどここへ来ていることをあの方にはお知らせしないようにと固く言い置いてきたものを、あの人たちったら何んの考えもなしに、そのことばかりでなく、おまけにあることないことまで大げさに話して聞かせたのだろう。ああ、何だか物物しいことになってしまいそうだな、——と思いつながら、ともかくもそうなたらそれまでと、湯のことを急がせて、御堂に上った。

暑かったので、しばらく戸を押しあけて眺めやっ

だが、ここはちようど山ぶところのようになるところになっていると見える。周囲にはすっかり小さな山々が繞めぐっていて、それらが数知れぬような木々に覆おおわれているらしいけれど、生憎月がないので、ほとんど何も見わけられない……

そうやって戸を押しあけたまま、御堂で初夜しよやを行って  
いるうちに、何時なのだろうかしら、時の貝を四つ吹く  
ほどになった。そのとき急に大門の方に人どよめきがし  
出したので、巻き上げていた簾みすを下ろさせて透して見て  
いると、木の間から灯がちらちらと見えてくる。やっぱ

りあの方は入らしつたのだ。

門のところまで、道綱は急いで御迎えに出て往つたらしかつた。やがて戻つてきて、あの方が車にお立ちになつたままで「御迎えにやつて来たのだが、生憎きようまで穢けがれがあるので、車から下りられない。どこかに車を寄せる所はないか」とおっしゃっていると取り次いだだが、私はそれには全然とり合わずに、「何をお考えちがいなすつて、そんな向う見ずな御歩きをなさいます。今宵こよいだけでもと思つてわたくしはここへ参つて居るので。もう夜も更けておりませう。早くお帰りなさいませ」と

返事をさせた。それからそんな文の往復を何度となく為合しあった。一丁ほどの石段を上ったり下りたりしなればならないので、それを取り次いでいた道綱は、しまいには疲れ果てて、ひどく苦しそうなくらいにまでなった。その上、殿が、これくらいのことごとりなせないのか、腑甲ふが斐いない奴だな、などとたいへん御気色が悪いと言つて、いかにも切ながっていた。それを見ていた側の者たちはしきりに不便ふびんがっていたが、私はどこまでも自分を守り通して拒絶したので、あの方もとうとう「よしよし、おれは穢れがあるからこのままこうしても居られない、

車をかけてくれ」とおっしやってそのまま御帰りなさる  
らしかった。私が覚えずほっとした気もちでいると、思  
いがけず、道綱までが、「まるもお送りして往きます。  
お車の後しりへでも乗せて往っていただきましょう。そうし  
てもう二度とまるもこちらへは参りませんから」と言い  
残したぎり、泣き顔をして出て往ってしまった。どんな  
ことになったってこの子だけは自分のものだと思ってい  
たのに、まあ、この子まで、何んて酷むじいことを言うのだ  
ろうと呆あきれながら、私はもう物も言えずにいた。が、し  
ばらくして、皆がもう出て往ってしまっただろうと思え

る時分になって、ひよつくりと道綱だけが戻ってきた。そうして「お送りいたそうとしましたら、殿がお前はこちらで呼ぶとき来ればいいと仰せになりました」と言うなり、もう溜らなくなったように、そこに泣き崩れていった。本当にどういうお気もちなのだか自分にもわからなかったが、「いくらあの方だってお前までをこのままになさりなどするものですか」と言いますかしながら、さまざまに道綱を慰めているうちに、いつか時は八つになつていた。こんな夜更けてからのお帰りを皆はお案じしながら、「路も大へん遠いのに、御供の人々も居合せたも

のだけしかお連れなさらなかったと見え、京の内の御歩  
きよりも人少なだったようでしたけれど——」などと言  
い合っていたが、私だけは無言のまま、強いてつれない  
ような様子を見せていた。

しかし夜の明けかかる時分、道綱がゆうべのことをし  
きりに気にしては「御門のところからでも御機嫌伺いを  
して参りましようか」と言いつづけているので、少しい  
じらしい気もし、文をもたせて京へ立たせてやった。「ゆ  
うべはずいぶん向う見ずな御歩きと存じましたが、夜も

更けておりましたので、ただみ仏に無事にお送り下さるようにとお祈り申し上げておりました。それにしても何をとお考えちがいなすって入らっしゃるのでしうか。たいへん頭が痛みますので、いますぐ帰ることも難しいかと思われませんが——」そんなことをなにくれと書いて、その端に、「途々も、昔御一緒に参ったことのあるのを思い出しながら参りましたが、ほんとうにあなた様のとばかりお思い申し上げているのです。やがてわたくしもここを下ります」と書き添えた。

道綱を立たせてやってから、明け方の空をぼんやりと



見やっていると、雲だか、霧だか、分からないようなものが、下の方から見る見るうちに涌わいて来て、それが互せめに鬩せめぎ合ってはどちらとへともつかず動かされながら、そこいら一面を物凄いほど立ちこめ出していた。……

昼頃、京から道綱は帰ってきた。「御留守でしたので御文は預けて参りました」ということだった。そうでなくとも、どうせ御返事はないに極きまっていると私は思った。

さて、昼はひねもす例のお勤をし、夜は主あるじのみ仏に

お祈りをする。周囲は山ばかりだから、昼間だって人に見られる気づかいはなかったので、簾などもすっかり巻き上げさせたぎりだった。——ただ、ときどき思い出したように間近かくの木々から鳥が何やら叫びながら飛び立つのに、覚えすぎくりとして誰か人でもと、あわてて簾を下ろしかけては、やっと見知らない鳥が二三羽翔かけ去っただけなのに気がつくようなこともあった。そんな時など、それほど空うっけたようになっていたりおりの自分の姿が、私にも何かしら異様に思われたりするのだった。

そのうちほどなく身が穢けがれになったので、私は一度里へとも思ったが、すぐ思い返して、その間だけ寺から少し離れたあるみすぼらしい山家に下りていることにした。それを聞きつけて、京から伯母おばなどがやって来てくれた。そんな馴れない山家住いだものだから、何だかちつとも気もちが落着かずに五六日を過しているうちに、もう月の中程になってしまった。山陰の暗いところを螢ほたるが小さく光りながら飛ぶのがしきりなしに見えた。里でまだしも物思いの少なかつた頃には、ついぞ二声と続け

て聞いたことのないのを怨めしがった時ほととぎす鳥も、いまは  
すっかり私にも打ち解けて、殆ど絶え間もなしに啼いて  
いた。水くいな鶏だつて、わが家の戸を叩いたかと思うくらい  
近くを啼いてゆく。——それにしても、何んとまあ物思  
い自身の巣くつているような栖すみかなのだろうかしら。そ  
れは自分から思い立つてこうしているのだから、誰も訪  
れてくれる者はなくとも、ちつとも辛いなどは思いも  
しないし、むしろ気安くていいとさえ思つてはいるもの  
の、ただ、歎かわしいと思うのは、こう云う物思いにも  
つてこいのような栖をさえ自分から好んでせずにはおら

れなくなつた自分の宿世すくせの切なさど、——それともう一つは、自分の死後に、日頃こうして自分の傍を離れずに長精進なども共にして頼もしげに見えるこの道綱が、他には力にすべき人もいないのでさぞ世間にも出にくいだろう、それにこうして精進している自分と同じような粗末な物をばかり食べさせているので、この頃はよく喉のどにも通らぬらしいのを見るのが自分には辛くてしようがない。——そんなことを考え続けながら、こんな思いを自分もしまた子供にまでさせてやっとうして自分が気安あやすくしているのかと思うと、遂にはその気安さそのものさ

え自分を苦しめ出してくるのだった。ああ、私は一体どうしたらよいのであろうか。……

夕暮の入相いりあいの音、 蝸ひぐらしのこえ、それからそれにつれて周囲の小寺から次ぎ次ぎに打ち鳴らされる小さな鐘などをぼんやり聞いていると、何んともかとも言いようのない気もちがされて来るのだった。

身の穢れている間は、一日中、何もすることがないの  
で、端近くに出ては、私はそうやってしまいは自分を  
言いようもなく苦しめ出すのが知れ切っているような物

思いばかりをしていたのだが、ある夕方も私がそんな端近くでいつまでもぼんやりしていると、後ろから道綱が気づかわしそうに「もうおはいりになりませんか」と私に声をかけた。子供心にも私に物をあんまり深く思わせまいとするのだろう。しかしもう少しこうして居たいと思つて、そのまま私がじつとしていると、再び道綱が「何だつてそんなことをなすつて入らっしゃるのですか。お体にだつてお悪くはありませんか。それに、まろはもう睡ねむくつてたまりませんから」と言いかけるので、私はついそんな子供にまで、まるで自分自身に向つて言

いでもするようには、「お前のことだけが気になって、こうして長らえているのだけれど——」と言ひ出した。「どうしたら好いのだろうね。尼にでもなったら一番好いのかしら。この世にいらなくなつてしまふよりか、それでも生きていたら、お前にしたつてお母あ様のことか気にかかればすぐ会いにも来られるし、それでいてあとはもうこの世にいないものだと言ひつめてもいられるでしょう。——そうやつて尼になつたつて、お前のお父う様さえ本当に頼りになるのなら、お前のごことは少しも心配は入らないのに、それがどうにももどかしいような気がす



るので、こうやって物思いばかりしているのだけれど……」と、ひとりごとのように言い続けているうちに、ふとこんな言葉が、かわいそうに、この子をどんなに苦しめているのだらうと気がついて、私は突然言うのを止めた。思ったとおり、道綱はもう返事もできないくらい、私の背後でやっと泣くのを堪えているらしかった。

五日ばかりで身が浄きよまったので、また私は御堂に上った。ずっと来ていて下すった伯母もその日お帰りになつて往かれた。その車がだんだん木の陰になりながら見え

なくなつて往くのをじつと見送つて佇たたずんでいるうちに、逆上でもしたのだろうか、私は急に気もちが悪くなつてひどく苦しいので、山籠りしていた禅師ぜんじなどを呼びにやつて加持かじして貰つた。夕ぐれになる頃、そんな人たちが念誦ねんずしながら加持してくれているのを、ああ溜まらな**い**と思つて聞き入りながら、年少の折、よもやこんなことが自分の身に起ろうなどとは夢にも思わなかつたので、そうなつたならどんなだろうなどと半ば恐いもの見たさにちようどこのような場合を想像に描いて見たことがあつたが、いまその時の想像に描いたすべてのことが一つ

も違わずに身に覚えられて来るようなので、何だか物の怪<sup>け</sup>でも憑<sup>つ</sup>いて、それが自分にこんな思いをさせているのではないかとさえ私は思わずにいられないくらいだった。

それほど、まるで何かに憑かれてもしたかのようになり、私が苦しみながら山に籠っているのを、京では人々が思い思いにああも言いこうも言っているようだし、のみならず、この頃では自分が尼になったというような噂までし出しているらしかったけれど、私は何を言われようと

も構わずにいた。それが善いにせよ、悪いにせよ、こう云うような私をそっくりそのまま受け入れてくれるのは父ばかりだと思えたが、この頃は京にいらっしやらないので、田舎いなかの方へすぐ便りを出して置いたところ、このほどその父から「そうしているのも好いと思う。なるべく目立たぬように、暫くでもそうやってお勤をしている分には、気も安まるだろうから」などと書いておよこしになった。父にだって今の私の苦しい気もちはほとんど御わかりになっていそうにも見えないながら、それなりにもそう父のようにおっしやつて下さるのが一番私には

頼りになるのだ。それにしても、私がこうしているところをこの間御覧なすって帰られたぎり、まだ一度も御消息さえおよこしにならないなんて、まあ、あの方は一体私がどんなになつたならば、私のことをもお顧みになつて下さるのだろうか。そう思うにつけ、私はこれよりもっと深く山に入るようなことがあるうたって、どうして里へなんぞ下りるものかと、ますます思いつめて往く一方だった。

ある朝、道綱に無理に「魚でも召し上って入らっしゃ

い」と言いつけて、京へ立たせてやった。が夕方近くな  
って、もうあの子も帰ってくるだろうと思っていた時分、  
俄かに空が暗くなり、つめたい風が吹きはじめたかと思  
うと、あたりの木々の葉がさあっと無気味にざわめき出  
した。悪いときに夕立になったなと思う間もなく、すぐ  
もうそこで雷がごぼごぼと物凄いような音を立て出し  
た。——途中でこんな夕立に出逢って、まあ、どんな思  
いをしているだろうと道綱の上を気づかいながら、几帳  
のかげに小さくなつて、私はじつと息をつめていた。お  
りおり山のずうつと彼方かなたに雷の落ちるらしいのが、そん

なに怯おびえた心には、すぐ目のあたりに落ちたのかと思われ  
るくらいだった。——そんな中でもつてさえ、私はい  
つの間にか、いつそこのままこうして自分が死にでもし  
たら、せめてはそんな痛ましい最後がおりおりあの方に  
自分のことを思い出させ、そのお心を充たしてくれるか  
も知れない——などと考え出していたが、しかし私はこ  
うしているだけでさえ怖くて怖くて、顔も上げられずに、  
いつまでも腑うつぶ伏したきりになっていた。

やがてあたりが薄明くなり出したのに気がついて、私  
ははっと何かから醒よめたような気もちになりながら、そ

んなちよつとの間だけ、ほとんど忘れ去っていた道綱のことを前よりも一層気にし出していた。それからほどなく、道綱は心もち蒼い顔をしたまま、無事に帰ってきた。

「夕立が来そうでしたので、いそいで帰って参りましたが——」と、途中の山路で夕立に逢った有様を恐ろしそうに話した。

こんどはあの方の御文を托せられて来た。「もしたまたま山を出られる日があつたら前もって知らせてくれ。迎えに往こう。何だかもうそちらで私のことなんぞはすっかりお見棄てらしいから、こちらから近寄るのはすこ



し怖い」などとある。私はそれをむさぼ貧るように読んでしまふと、すぐ何でもないようにそれをそのまま打棄てて置いた。

それから二三日後、道綱が「どうか先日の御返事を下さいますか。またお叱りを受けるかも知れませんから、早く持参したいと思えます」としきりにせびるのだった。私はもうあの方にそんな返事など上げる気もちにはなれそうもなかったので、何のかのと言ひ紛らしていたが、しまいには道綱が可哀そうになって、何を書いたのやら

自分でも思い出せないようなことばかりを書いて持たせてやった。

すると、また、この間とちようど同じような時刻になると、突然夕立が来た。そうしてこの前よりももっとはげしいかと思えるような雷が鳴り出した。しかし今度は私は、簾みすも下ろさずに、横なぐりの雨に打たれながら木木が苦しみもだえるような身ぶりをしてるのを、ときどき顔をもたげては、こわごわじっと見入っていた。そうして私は、もし自分が本当に苦しむことを好んでいるのだったら、こんなに何もこわがりはしないだろうにと

思いかえしながら、だんだん長いことそれを見つめ出していた。ときおりそんな自分の目のあたりを、その稲光りとともに、どこかの山路で怯おびえている道綱の蒼ざめ切った顔が一瞬間閃ひらめいて過ぎよつたりするのだった。……

が、そのうちに、私はそれにもめげずに、じっと空中に目を注いだなり、いつか知らず識うちらずの裡うちに自分自身をその稲光りがさっと浴びせるがままに任せ出していた。あたかもそうやって我慢がをしていることだけが自分のもう唯一の生き甲斐がでもあるかのように。……

## その六

ある日の昼頃、突然、大門の方で馬が気もちのいいくらい高く嘶いなないた。それがどういうわけか、私のうちに言うに言われないような人なつかしさを蘇よみがえらせた。……それからやがて人のおおぜい来たらしい気配がしだした。簾を透かして見ていると、立派な装束をした人々も数人見え、それが木の間をこちらへだんだん近づいて来るのだった。その中には関かんぱく白殿の御子息の兵衛ひょうえのすけ佐

などもお見えになっている。先ず、道綱をお呼び出しになつて「これまでたいへん御無沙汰申していたお詫<sup>わ</sup>びかたがた、こうやって参りました」と私の方へ取り次がせて置いて、そのまま物静かに木の陰にお立ちになつていられるその兵衛佐の御様子は、何とも言えず奥床<sup>おくゆか</sup>しく、京ちかく覚えられるくらいであつた。

「大へんお懐<sup>なつか</sup>しいことです、どうぞこちらへおはいりなさいますように」と私はすぐお通し申させた。すると兵衛佐は勾欄<sup>こうらん</sup>にもたれて手水<sup>ちょうず</sup>などされてから、こちらへおはいりになつて入らした。いろいろの物語のついで

に「昔わたくしとお会いしたのを覚えていらっしやいますか」と私になつかしそうに訊くと「どうして忘れなどいたすものですか、確かに覚えておりますとも。今こそこう心ならずも疎遠そえんにいたしておりますが——」などとお答えなされて、それからそれへとその昔の頃のことを一しよになって思い出しながら、さまざまな物語を続けていた。が、そのうちに私がふいと物を言いかけて、何だか急に声に変になりそうな気がしたので、そのまま少しためらっている、相手にもそれがおわかりになったものと見える。すぐには物もおっしやられずにいたが、

やつと兵衛佐は口を開かれて「お声までがそうお変りなされるのも尤もつとものこととは思いますが、もうそんなことはお考えなさいますな。このまま殿がお絶えなされるなんということがあるものですか。どうしてそう御ひがみなされるのか、私どもにはわかりませぬ。殿もこちらへ参つたらようく言つて聞かせてやってくれなどと仰せられていました」と私を慰めるように言われる。「何もあなた様にまでそう云う御心配をしていたただかなくとも、いずれそのうちここからは出るつもりなのですけれど——」と私がいつになくついでな返事をすると、「そ

れなら同じことですから、今日お出になりませんか。私どももこのまま御供いたしましょう。何よりもまあ、この大夫がときどき京へ出られては、日さえ傾けばまた山へお帰りを急がれるのを、はたで見えていましても本当にお気の毒なようで——」などと道綱のことまで持ち出して切しきりに口説くどかれるけれど、私はもう何か他のことでもじつと思いつめ出したように、返事もろくろくしないようになつた。そのうちに兵衛佐もとうとうお諦めになつたように、しばらくまた他の物語などし出されていたが、それももう途絶えがちで、夕方になると、お帰りになつ



て往かれた。

そういう兵衛佐などにお目にかかるにつけ、ふいと京恋しさを溜らないほど覚えたが、それをやっと抑えつくながら、ただお懐しそうに昔物語をし合っただけで、つれなく京へお帰ししてからと云うもの、私が何とはなしに気の遠くなるような思いで数日を過ごしていたところへ、京で留守居をしている人のもとから消息があつた。「今日あたり殿がそちらへ御迎えに入らっしやるように伺いました。このたびもまた山をお出なさらないよう

すと、世間でもあまり強情のように思うでしょうし、それに後になってから、もし山をお出なさりでもしたら、それこそどんなに物笑いの種になりますことやら」などと言ってきた。そんな世間の噂うわさなぞどうだって構いはしないのだ、いくらあの方が御迎えに入らしたって、自分で出たい時にならなければ出やしないから、と私は自分自身に向って言っていた。ちようどその日、私の父が田舎から上洛じょうらくして来たが、京へ著くなりその足ですぐやって来て下すった。そうしてさまざまな物語をし合った末、父はつくづくと私を御覧になりながら「そうや

ってしばらくでもお勤をするのが好いと私も思っていたが、だいぶ弱られたようだな。もうこの上はなるべく早く出られた方が好いだろう。今日出るきょう気があるなら一緒に出ようではないか。」そんなことを父までがいかにも確信なされるようにおっしやり出すのだった。私はそれにはどう返事のしようもなく、まったく一人で途方に暮れてしまっていたが、そういう私にお気づきになると「じや、また明日でもやって来て見よう」と気づかわしそうに言い残されたまま、その日は父も急いで下山なすった。

それから数刻と立たないうちに、大門の外に突然人どよめきがし出した。とうとうあの方が入らしったのだろうと思うと、私はますます一人でもってどうしたら好いか分からなくなってしまった。今度はあの方も遠慮なさらずにずんずん御はいりになって入らっしやるようなので、私は困って几帳を引きよせて、その陰に身を隠しはしたけれど、もうどうにもならなかった。そこに香や数珠ずずや経などが置かれてあるのをあの方は御覧なされると「これは驚いた。まさかこんなにまで世離れていようとはおれも思わなかった。もしかしたら山を下りられはすまい

かと思つてやつて来て見たが、これでは山を下りでもしたら罰があたるだろう。——どうだ、大夫、お前はこうしているのをどう思っているな」と傍にいた道綱をお振り向きになつて尋ねられた。「大へん苦しゅうございませぬ、いたし方がござりませぬ」と道綱は打ち伏したまま答えた。「かわいそうに」とあの方はおっしゃられながら「じゃ、とにかくお前がお母あ様に出ていただきたと思われるなら、車をこちらへ寄こしてくれ」とお言いつけなさりも果てぬうちに、もうあの方はお立ちになつたまま、そこいらに散らばっていた物なんぞを御自

分で取り集められ出した。そうしていつの間にかそこに寄せられたお車の中へそれをみんな入れさせ、それからその居間に引いてあつた軟障ざしまでも御はずしになり出していた。

私が呆あきれて物も言えずにそれを見ていると、人々は互に目食わせしたりしながら、笑を含んで、そういう私の方を見守っているらしかった。「こうしてしまつたら、ここをお出でになるより外はあるまい。まあ、み仏にもよくわけを申し上げると好い、それが作法のようだから——」などと、あの方は事もあろうにそんな常談までお

っしやっていた。私はもう一言も口がきけず、車の支度がすっかり出来てしまつてからも、いつまでもじつと身じろぎもせず<sup>に</sup>いた。

あの方の入らしたのは申まをの刻頃だったのに、もう火ともし頃になつてしまつていた。しかしまだ私がなかなか動きそうにもなかつたので「よしよし、おれは先へ往くぞ。あとは、大夫、お前に任せる」と道綱にお言ひになつて、ずんずん先に出て往かれた。道綱は「早くなさいませ」と私の手をとつて、いまにも泣きそうにしていた。こうなつてはもうどうにもしようがない、みすみす

山を出て行かなければならない私は、自分なんだか他人なんだか分らないようなほどになっていた。……

大門を出ると、あの方も同じ車に乗って来られて、道すがら、いろいろ人を笑わせるようなことばかりおっしやっていた。けれども、私は物も言う気にはなれなかった。一しよに乗っていた道綱だけ、ときどき笑を噛み殺しながら、それに内気そうにお答えしていた。

はるばると乗って、やっと家に着いたのは、もう亥いの刻にもなっていた。



京では、昼のうちから私の帰る由を言い置かれてあつたと見え、人々は塵掃ちりはらいなどもし、遣戸やりどなどもすっきり明け放してあつた。私は渋々と車から降りた。そうして心もちも何だか悪いので、すぐ几帳を隔てて、打ち臥している、其処へ留守居をしていた者がひよいと寄つてきて「瞿麦なでしこの種をとろうとしましたら、根がすつかり無くなつておりました。それから呉竹くれたけも一本倒れました、よく手入れをさせて置きましたのですが——」などと私に言い出した。こんなときに言わずとも好いことをと思

って、返事もしらずにいと、睡っていられるのかと思っ  
ていたあの方が耳ざとくそれを聞きつけられて、障子ご  
しにいた道綱に向って「聞いているか。こんなことがあ  
るよ。この世を背そむいて、家を出てまで菩提ぼだいを求めようと  
した人にな、留守居のものが何を言いに来たかと思うと、  
瞿麦がどうの、呉竹がどうのと、さも大事そうに聞かせ  
ているぞ」とお笑いになりながらおっしやると、あの子  
も障子の向うでくすくす笑い出していた。それを聞くと、  
私までもつい一しよになっておかしいような気もちにな  
りかけていたが、ふとそんな自分に気がつくが早いかな、

それがいかにも自分でも思いがけないような気がしながら「私と云うものはたったこれっきりだったのかしらん」と思わずにはいられなかった。……

その夜も更けて、もう真夜中近くになりかかった頃、あの方が急にお気づきになったように「どちらが方塞かたふさがりにあたるか」とおっしやられたので、数えて見ると、ちょうど此方が塞ふさがっていた。「どうしようかな」と、あの方もお当惑なすったようにおっしやって、「ともかくも、一緒にどこかへ移ろうじやないか」と私をお促しなさるけれど、私は打ち臥したぎり、まあ、こんな

ことつてあるものかしらと、胸のつぶれるような思いに身を任せながら、しばらくは返事も出来ないほどになっていった。それから私はようやくやっとの思いで口を開きながら「また他の日にいらっしやいませ。ほんとうに方<sup>かた</sup>がお明けになってから入らっしやると好かったですのに」と諦め切ったように言った。あの方も、とうとう外にしようがなさそうに「例の面白くもない物忌になったか」とぶつぶつ言われながら、真夜中近くをお帰りになって往かれた。そういうあの方の後ろ姿は、私の心なしか、いつになくお辛そうにさえ見えた。

翌朝、すぐ御文をおよこしになった。その御文も「うべは夜も更けていたのでひどくつらかったぞ。そちらはどうだったな。はやく精進明けをしなさい。大夫も大ぶやつ窶やつれていたようだから」と、いつもに似ずお心がこもっているようだった。こうやってまでして、山から下りたばかりの私をおいたわりになろうとなすっていられるあの方のお心ばえも、そんな生憎な物忌のために、しばらく私からお遠のきになって入らっしやる間に、また昔のようにつれなくおなりになられそうなことぐらいは、私にもよく分かっていた。しかし私には、それをそのま

まに任せて置くよりしかたがないのだった。

## その七

そう云うあの方の御物忌のお果てなさる日を私は空しくお待ちしているうちに、やがて七月になったが、ある日の昼頃に「やがて殿がお出になるはずです、此方におれとの仰せでした」と言つて、侍どもがやって来た。こちらの者も立ち騒いで、日頃から取り乱してあつた所などをあわてて片付け出していた。私はそれを何かしら心

苦しいような思いで見ている。が、なかなかお見えにならないままに、日が暮れてしまったので、来ていた侍どもも「御車の装束などもすっかりなすってしまわれたのに、どうして今になってもお見えにならないのかしら」などと不思議そうに言い合っていた。そのうちにだんだん夜も更けて往くばかりだったが、とうとう侍どもが人を見せにやると、その使いの男が帰ってきて「今しがた装束をお解きになって御隨身たちもお引取りになりました」と告げ知らせた。

その翌朝、道綱が「どうして入らっしやらなかったの

か伺って参りましょう」と自分から言って出かけて往った。が、すぐ戻って来、「ゆうべは御気分がお悪かったのだそうです、急にお苦しくなられたので、伺えなくなつたとおっしゃっておられました」と私に言うのだった。そんなお心の見え透くような御言葉なら、いっそ何にも聞いて来なかつた方がよかつたくらいだったのに。同じ御返事にしたって、もっと私の気もちをいたわって下さるようなお言葉がお言いになれないものなのかしら。せめてものこと、「急に差さし障さわりが出来たので往かれなくなつてしまった。もしか都合がついたらすぐ往こうと思



っていたので、車の用意もそのままにさせて置いたのだが——」なんぞとでも言ってお下されば、まだしも私の気もちも好いものを。

やっぱり自分の思ったとおり、少しはお心が変られるのかなと考えたのはあの時の私の考え過しで、あの方は相変わらず以前のあの方だけだったのらしい。そうして私だけが——そう、私は少くとも、あの山から帰って来てからは、もう昔のような私ではなくなりかけているのだ。……

その日もまた、私がそんな考えをとつおいつし出して

いたところへ、西の京にお住いになっ  
ていられるあの方の御妹から御文  
があつた。見れば、まだ私があれ  
からずつと山に籠つてゐるものと  
ばかりお思ひになつていらし  
つて、何くれと物哀れげにおつし  
やつて「どうしていつまでもまあ  
そんなお淋しいお住いをなすつて  
入らつしやるのでしよう。そのよ  
うなお住いをも一向苦になさらず  
にお訪ねいたすお方だつておあり  
でしように、つれないあの人はこ  
の頃あなた様からもお離れ<sup>か</sup>がちだ  
とか。本当にどうして入らつしや  
るかとお大へん氣になつておあり  
ますので、ちよつと——」と書いて  
およこしになつた。そこ

で私はつい今もいま考えていたままに「山の住いはずつと秋までいたそうと思っておりましたのに、またこうして心にもない里住いをいたすようになりました。——仮りに山に入っても、私のような意気地のない者はまことに中途半端なものでございますこと。だが私も、今度と  
いう今度ばかりは本当に苦しい思いをいたしました。しかしそのような苦しい思いも、みんなあの方が私にお与え下さるものとおもえばかえっていとしくて、ある時などは自分から好んでそれを求めたほどでございました。どうぞこういう言葉を私がただ奇矯キノキョウなことを申すように

お思いなさらないで下さいまし。そういうおりおりの空<sup>うつつ</sup>けた私にはどうかいたすと、そんな苦しみがなければないで、かえって一層はかなく、ほとんどわが身があるかないかになってしまいはせぬかと思われるほどなのでございますから。——ただ、それほどまで私にとっては何の糧<sup>かて</sup>にも等しいほどな、その苦しみのお値打にも、それを私にお与え下さっている御当人は少しもお気づきになつて入らつしやいませんようなのですもの。私はそれに基づいてこの頃あの方のために何んだかお気の毒に思っておりますくらい。——本当にこんな人並ならぬ気もちさえい

たしておりますほどの私の心のうちは、誰やらの申しました『深山がくれの草』とばかり思えて、いくら繁くとも誰方どなたもお認めなさいますまいと思っております」と書いて送った。

そう、本当に私はもう昔みたいにあの方のためになんぞ苦しむまいとは思わないが好いのだ。いくらあの方からお離れしようとも、もう自分がお離れできないことはよく私にも分かっているはずだろうから。まあ、こう云ったこの頃の私の切ない心もちと云ったら、あの根を絶たれて、もうすべての葉は枯れ出しながら、しかもまだ

そのか細い枝は以前のままに他の木の幹にからみついたままでいる、あの蔓草つるくさに似ているとでも言えようかしら。

## その八

それからほどもないある夜のことに、思いがけずあの方がひよつくりお見えになった。そうしてこの間の晩のこ  
とをしきりにお言いわけなすって、「今宵こよいこそと思った  
から、忌違いみたがえに皆が出かけると云うのを出して置いて、  
おれだけこちらへ急いでやって来た」などとおっしゃら

れていた。しかし私には、そう云うあの方のお心の中がすっかり見え透いてでもいるかのように、あんまり言いわけがましくおっしやるのをかえっておかしいくらいに思いながら、あの方をいかにも何気なさそうにおもてなしをしていた。

そんな自分を自分でもずいぶん昔とは変ったなと思っていたが、さすがにあの方にもそう云った今の私がまるで別人のようにお見えになるらしく、それがいつも屈託なさそうにして入らっしやるあの方までを、いくらか不安におさせしているらしかった。しかし、明け方になる

と、それをただそのことの所為せいにでもなさるかのよう  
に、「勝手の分からぬ所に参っている者共はどうして  
いるだろうな」とおっしやりながら、何か気がかりな  
ように、お歸りになつて往かれた。

それからまた数日の後だった。今度伊勢守いせのかみになられた  
私の父は、また近いうちに任国へお下りにならな  
ければならなかった。それでしばらくでも御一緒  
に暮らしたいと思つて、あの方にはお知らせも  
せず、私は父と共にある物静かな家に移つた。  
そんなにまでしたのに、それ



から二三日したある午頃ひるご、急に南面の方が物騒がしくな  
った。「誰だろう、向うの格子こうしを開けたのは」と私の父  
までも驚いて、皆と一しよに立ち騒いでいると、そこへ  
突然あの方がおはいりになつて入らした。そうしてい  
きなり私の前に立ちはだかつて、いくらか色さえお変え  
になりながら、傍らにあつた香や数珠ずずを投げ散らかされ  
出した。しかし私は身じろぎもせず、どんなことをな  
されようとも、じつところえながらあの方のなさるがま  
まにさせていた。

そんな心にもない乱暴なことをなさりながら、かえつ

てあの方が私にお苦しめられになっ  
ているのが、どうと  
いうこともなしに、ただ、そうや  
ってあの方のなすがま  
まになっ  
ているうちに、私には分かつて  
来たのだった。  
しかし御自分ではそれには一向  
お気づきなされようとも  
せずに入らっしやるらしか  
った。

それからやっ  
とあの方は御自分にお立ち返  
りになられ  
たかと思  
うと、何だ  
ってそんな  
ことをな  
すったの  
かはよ  
くお分  
かりに  
ならぬ  
ながら、  
急に  
いま  
までの  
何も  
かも  
を  
ほん  
の一  
時の  
御戯  
れだ  
った  
と  
でも  
云  
う  
よ  
う  
に  
な  
さ  
ろ  
う  
と  
し  
て、  
私  
に  
い  
つ  
も  
の  
よ  
う  
な  
御  
常  
談  
な  
ん  
ぞ  
を  
言  
わ  
れ  
出  
し  
た。

私も私で、あの方がかりそめにも私のためにお苦しめられになったなんぞと云うことをあの方にはお分かりにならせぬのが、せめてもの私の思いやりでもあると云ったように、さも何事もなかったようにしていた。しかしあの方はまだ何かがお気になると見え、御常談もいつもほど思うようにはおっしやれずにいらした。

それからその夜は、あの方は私といつになくお心をこめてお語らいになられ出した。私はといえ、そんなことももう別に嬉しいとは思わずに、ただ、何もかもすっかりあの方のなさるがままになっていた。そうしてあく

る朝になって、やっと平生のいかにも颯爽さつそうとしたお姿に立ち返えられながら、お帰りになって往かれようとなす  
っているあの方の後ろ姿を、突然、胸のしめつけられる  
ような思いで見入りだしているのは、いつか私の番にな  
っていた。……





日本文学電子図書館

---

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行

---



日本文学電子図書館